

Sato Project

Sato Project

農業が環境を破壊するとき —ユーラシア農耕史と環境—
「里」プロジェクト

お問い合わせ

総合地球環境学研究所佐藤プロジェクト (加藤早稲子) e-mail: sato@chikyu.ac.jp

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 Tel:075-707-2384 Fax:075-707-2508



プラチンブリ・イネ研究所の野生イネ保全地区での
見学会参加者

(撮影：武藤千秋)

佐藤プロジェクト主催
「International Symposium on Wild Rice 2009」
を終えて・・・残ったモノは？

田中克典 (総合地球環境学研究所)

佐藤プロジェクト主催 「International Symposium on Wild Rice 2009」 を終えて・・・残ったモノは？

田中克典（総合地球環境学研究所）

プロジェクトの本研究がスタートして早4年、佐藤プロジェクト・モンスーン農耕班（通称：イネ班）にとって一大イベント「International Symposium on Wild Rice 2009」（以下、野生イネシンポ）が終了しました。野生イネシンポは2009年11月22日～24日にタイ・バンコクのソフィテル・センタラグラント・バンコクホテルにて開催しました。前回のニュースレターで原田信男先生が紹介されましたが、この一週間前にはプロジェクト主催の「第3回 焼畑サミット in 大分」が執り行われましたことで、おかげさまで11月はいつになく忙しい日々を過ごすことができました。

さて、さかのぼること約50年、岡彦一先生が最初に東南アジアへ野生イネの調査に赴かれました。以来今日まで、多くの研究者が野生イネの自生地を発見し、遺伝資源を収集しつつ、保全活動を行ってきました。タイ・プラチンブリ・



図1 ラオス・トンムアン村の野生イネ保全地区
保全地区の面積は約110アール

イネ調査研究所、ラオス・イネ商業作物研究所では野生イネを含めた自然環境を保全（*in-situ* conservation）する思想に基づいて保全地区が設けられました（図1）。またこの間、インドネシア、フィリピン、ベトナム、カンボジア、ラオス、タイと研究協定を締結し、各国間との研究交流、野生イネの研究を推進してきました。

この一連の活動の過程で、「野生イネをどのように保存すべきか?」、「研究者やイネ研究所の関係者一同が野生イネのこれまでの研究成果を共有しつつ、意見交換する場が必要なのでは?」という課題がでてきました。そこで、研究者が一同に会する場所を設けるべく、野生イネシンポを地球研・佐藤プロジェクトとタイ・イネ局およびチェンマイ大学との共催で開催する運びとなりました。

シンポジウム全体の参加者は125名で12の国々から研究者、あるいはイネ研究所の関係者が出席しました（図2）。参加研究者の分野は、作物学、遺伝学、考古学、文化人類学、民族学と多岐にわたっていました。また、シンポジウムにはこれまで野生イネの保全活動に努めてこられた彫刻家の田辺光彰氏に参加いただいて、シンポジウムのために新たに製作されたモミの絵と彫刻、さらにこれまでの活動風景を納めた写真を展示していただき、シンポジウムに花を添えていただきました（図3）。



図2 セレモニーの様子



図3 田辺氏が描かれた野生イネのモミにサインをされる小町閣下
絵は参加者全員がサインをしていただいたことで、
共同声明に近い意味のモノとなりました。

シンポジウムはエクスカージョンとワークショップとで構成されました。エクスカージョンはワークショップの前日に開催し、プラチンブリ・イネ調査研究所（図4、表紙参照）とパトゥンタニ・イネ研究所、さらには先述した田辺氏が製作されたモミのモニュメントを見学しました。共催のタイ・イネ局は野生イネの保全に力を入れており、研究所に訪れた際には熱心に野生イネの評価と保全について活動報告をしていただきました。ただ、その活動理念とは裏腹に、野生イネは開発により激減の一途を辿っているとのことで、非常に残念でなりませんでした。



図4 プラチンブリ・イネ研究所の野生イネ保全地区での見学

翌日11月23日からはワークショップですが、これに先立ちセレモニーとポスターセッションを開催しました。セレモニーにはタイ・王室顧問のアンポル氏、在タイ日本大使の小町恭二閣下、タイ・農業組合省事務次官のユッコル氏にご出席していただき、開催の祝辞をいただきました（図5）。



図5 セレモニー集合後の記念写真
参加者が多く、VIPと主催社代表とで写真を撮影した。
中央下が王室顧問のアンポル氏。



図6 ポスターセッションの様子
ポスターセッションはコーヒーブレイクと同時進行だったのでリラックスしながら議論していました。

また、アンポル氏には、この後の基調講演でタイ王室が野生イネの研究や保全活動に尽力を注いできたことを紹介していただきました。リボンカット終了後に開催を告げたポスターセッションでは、14名の研究者が成果を公開し、野生イネの特性や利用について、研究者同士が顔をつきあわせて議論をしていました（図6）

ワークショップは野生イネの多様性、特性、有用性や保全に関連した6つの項目に分けて開催し、計28名の研究者に話題を提供していただきました（図7）。時として、この類の国際会議に遺伝学者が集まると技術論に話題が集中しがちなのですが、いくつかのワークショップでは人間の生活と野生イネとの関わりや、そこから生まれた文化について話題がおよび、野生イネの保全策を議論するだけでなく、これからの農業のあり方についても議論がなされ、佐藤プロジェクトにとって参考にすべき意見が伺えました。ただ、短期間に内容が凝縮されていたため、消化不良だった議論もありました。特に、野生イネは有効に利用することでさらに保全する意義が高まることを考えると、育種が果たすべき役割について突き詰めていくべきだと思いました。



図7 ワorkshop 2日目の会場の様子
参加者は2日目にもかかわらず100名余と多く、話題に耳を傾けて、休憩時には熱心に議論をしていました。

今後、参集していただいた研究者、あるいは開催に協力いただいた東南アジアのイネ関連研究機関が中心となって、保全活動を推進させること、また定期的に会議を開催して情報を共有する場が必要です。そこで、ワークショップで提案された内容を盛り込みつつ、活動推進のためにバンコク宣言書が策定されました。会議はこの宣言書の締結をもって閉会となりました（図8）。



図8 報告書を取りまとめて宣言書を作成しているソクラン氏
宣言3分前の最後の追込みでした。文中にも記載しましたがソクラン氏には大変お世話になりました。

野生イネ会議には、本当に多くの方々に携わっていただきました。タイ・イネ局所長のプラサート氏を始めそのスタッフの方々、会期中にご来場いただいた方々、演者、表舞台や裏舞台で働いていただいた方々、ホテルのスタッフ、そして佐藤プロジェクトのメンバーには、感謝の一言では言い表すことができないほどのご協力をいただきました。特に、タイ・イネ局顧問のソクラン氏には開催の立案から宣言書の作成に至るまで、時には来日して開催の準備をすすめていただき、この会議で彼の寿命が縮んだのではと思えるほど現地窓口として力を尽くしていただきました。これら全てのメンバー、事柄がプロジェクトにとって、また自分にとって次につながる財産として残りました。

話は変わって、2010年の2月に入って年度末の締め追われています。時折、小生の近くで野生イネ会議の演者の名前が聞こえてきます。どうやら野生イネ会議の旅費について話しているようです。佐藤プロ・財務省の沖田さんに財務処理を一手に引受けていただいたことで、本当に申し訳なく思う時が在りました。